

那珂川町の文化財

＝ 暮らしのうつりかわり・民具 ＝

2000

那珂川町教育委員会

くらしの 道具

むかしは、便利な電化製品もなく、ご飯をたくのも、洗たくをするのも大へんな仕事でした。そのころは、身近にある材料を使ってさまざまな道具を作り、くらしに役立てたそうです。人々の生活を支えてきたそのような道具を“民具”^{みんぐ}といいます。

那珂川町にも、いろいろな民具が残っています。ここで紹介していきましょう。



▲羽釜(はがま) [片縄 織田ミツ氏]



▲おひつ [上梶原 八尋久義氏]



▲エグリ [仲 香月芳祐氏]



▲ご飯じょうけ [松木 武末義成氏]



◀茶釜と五徳
(ちゃがまごとく)



▲雲助甕(うんすけがめ)

しょうちゅう
焼酎の上澄みを取り出しやすいように注ぎ口がついています。 [松木 武末善成氏]



▲徳利(とっくり)
[後野 井上誠氏]



▲わりこ

木製うるし塗りの弁当容器の一種です。これに一家族分の食事を入れて、花見やおこもり、運動会などに出かけました。

このわりこの裏ぶたに、“明治四拾参年十一月代金二円八拾銭、七”という銘が残っています。

[下梶原 後藤弘孝氏]



▲ポッポ膳(ポッポぜん)

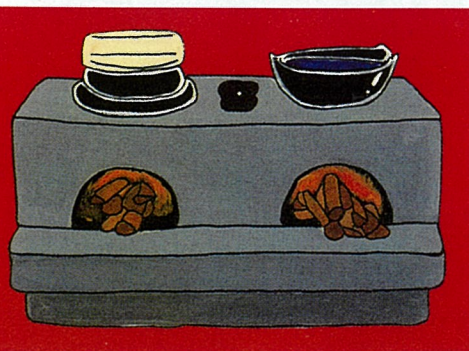
かぞえて3才になる男の子の誕生日を祝うための料理をのせるお膳です。写真のお膳は、昭和50年に箱崎で購入されたものです。

[片縄 織田ミツ氏]

むかしの台所

今の台所とちがい、むかしは土間(どま)という、床が地面のままの場所で炊事をしました。土間にはカマドがあり、そこでマキを燃やし、羽釜でご飯をたきました。たきあがったご飯は、おひつに入れて食膳へ運びます。おひつは木でできていて、湿気をすうので、ご飯が冷めてもべとつきにくかったそうです。

冬は、ワラで作ったエグリにおひつを入れてご飯を冷めにくくし、夏は残ったご飯を竹で作ったご飯じょうけに入れ、風通しのよい所に下げてくきにくくしました。



◀イラストの
ようなカマ
ドでご飯を
たきました。

衣服とはきもの

わたしたちは、毎日なにげなく洋服を着ていますが、このような洋服がふだんに着られるようになったのは、だいたい50年くらい前からのことです。そのころまでの衣服といえば、おかあさんやおばあさんの手づくりの着物がほとんどでした。布をぬい合わせて着物にするまですべて手作業で、女性たちはそれを夜なべ仕事でしていたそうです。

はきものは、ワラを材料とした手づくりの草履^{ぞうり}をふだんにはいていました。

足半^{あしなか}は、鼻緒^{はなお}を結んだ短い草履で、ふつうのものにくらべて、台の部分が足の裏の半分ほどしかないのでこの名前がつけました。どんなにつまさきに力がかかっても切れることはなく、泥をはねたり、すべったりしないので、むかしは農作業などに欠かせないはきものでした。木製の^{げた}下駄は、よそゆき用として使われました。

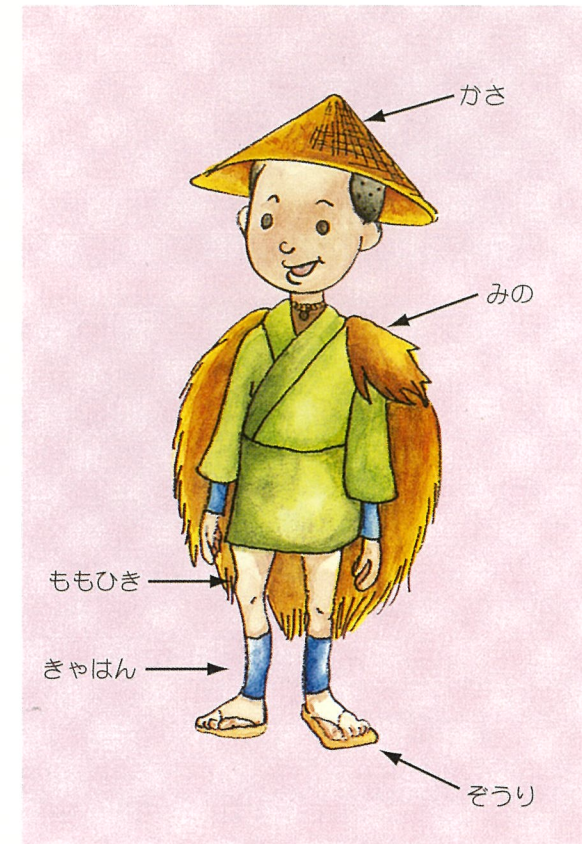


▲足半と草履
(あしなかとぞうり)



〔蓑:井尻 結城和直氏〕

◀笠と蓑(かさとみの)



雨の日の農作業着



▲べっ甲の櫛と髻(べっこうのくしとこうがい)〔仲 金丸又男氏〕



▲宮参り着(みやまいりぎ)〔松木 小森信子氏〕

あかりと住まい

この50年の間に、わたしたちの住まいのようすは大きく変わりました。便利なものがふえ、くらしはゆたかになりましたが、なによりも、電気が使えるようになって、夜も昼と変わらないくらいの明るい部屋の中で過ごすことができるようになりました。それまでのくらしでは、ロウソクやランプのほのかな明かりをたよりに夜を過ごすしかなく、子どもたちは夕飯のあと早寝をすることがふつうだったそうです。



▲タンス

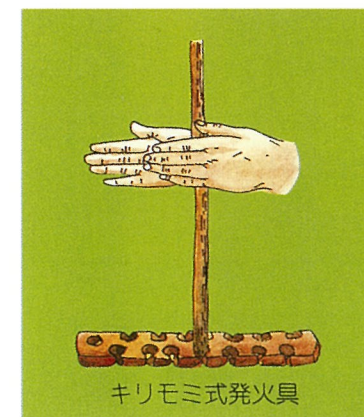
一番下の引き出しの中に、墨で年号が書かれています。それにより、このタンスが元治二年(1864年)に三両八朱で購入されたことがわかりました。江戸時代の銘が残るタンスはめずらしく、貴重な民俗資料といえます。〔松木 小森 信子氏〕

長持ち(ながもち)▶

かぶせぶたを持つ長方形の収納具です。来客用の布団などはこの中に収納されました。

また、嫁入りのときには、この中に着物や布団といった嫁入り道具を入れて運んだということです。

〔下梶原 後藤弘孝氏〕

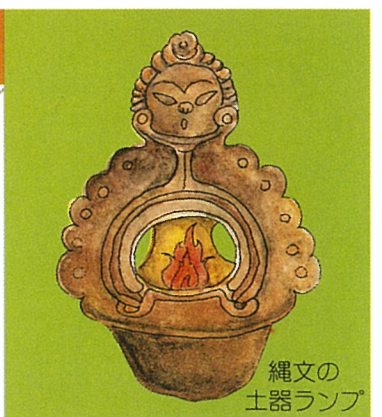


キリモミ式発火具

古代の火

電気もロウソクもない大昔、人は木と木をすり合わせて火をおこし、明かりとしていました。

木の棒と板をすり合わせるキリモミ式発火法^{きりもみしきはつぱう}は、縄文時代から平安時代まで日本の多くの地域で行われていた方法で、なれた人だと10秒前後で火がおこせるそうです。そうしておきた火は、土器で作ったランプなどに入れて、明かりとしました。油は、鯨やイルカなどの脂^{あぶら}を使ったようです。

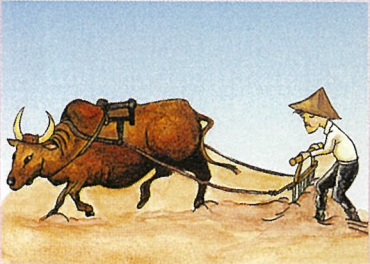


縄文の土器ランプ



提灯▶
(ちょうちん)



米づくりの仕事	使った道具
春 ○「苗どこ」にもみをまく (苗しろ) ○田の土をほりおこしてやわらかく する (田おこし)  ○田に水を引き入れ、土をやわらかく する (しろかき)	鍬(くわ) 鋤(すき) 犁(からすき) 馬鍬(まが)

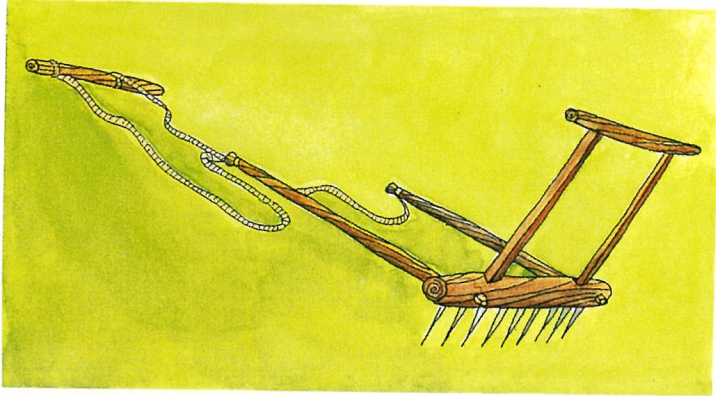
田畑で 使った 道具

今は、農作業も機械化されていますが、むかしは多くの手間がかかるつらい作業の連続でした。

なかでも、米づくりは大変な労働でした。そんなつらい農作業を少しでも楽にしようと、人々はさまざまな道具を作り、工夫と改良をかさねてきたのでした。



▲平鍬・叉鍬(ひらくわ・またくわ)
鍬は、おもに田畑をたがやすときに使う道具で、土に打ち込み、引くようにして使いました。



▲馬鍬(まが)
田をたがやす道具で、ふつうは牛か馬に引かせて使いました。昭和30年代まで使われましたが、その後、耕運機に変わって姿を消していきました。

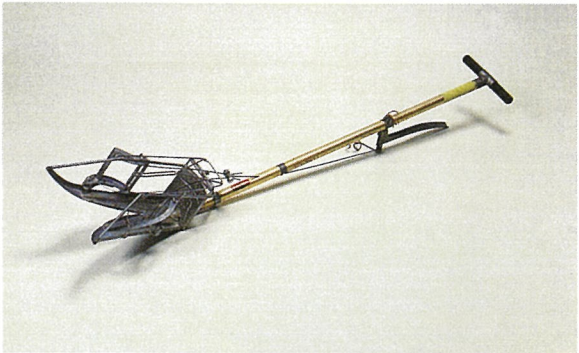


▲持立犁(もったてすき)
田畑をたがやす道具で、牛や馬に引かせて使いました。江戸時代の終わりごろ、北部九州で発明されたといわれています。
〔松木 白水金生氏〕

米づくりの仕事	使った道具
夏 ○梅雨のころ田に苗をうえる (田うえ)  ○水を管理して田の水がかれないようにする ○草とりをする	田植網(たうえづな) 田植定規(たうえじょうぎ) 水車(すいしゃ) 雁爪(がんづめ) 機械雁爪(きかいがんづめ) 二間押し(ふたまおし)



▲機械雁爪(きかいがんづめ)
明治時代に発明された除草機(草とりに使う道具)です。手押し車を押すようにして使いました。
〔松木 武末善成氏〕



▲稲刈り機(いねかりき)
〔松木 武末善成氏〕



▲二間押し(ふたまおし)
きかいがんづめ じょそうき
機械雁爪と同じ除草機です。機械雁爪で除草したあと、ふたたびこの農具で稲の間を何度も押しました。



▲鎌と石包丁(かまといしぼうちょう)

鎌は、稲や麦の刈りとりのほかに、草刈りやまぐさ刈りなどに使い、農民がいつも身につけていた道具です。稲を株ごとに根もとから刈り取るようになったのは古墳時代から後のことで、弥生時代ごろの稲刈りでは、石包丁といわれる道具を使って、稲穂だけをつみとっていました。

米づくりの仕事	使った道具
秋 ○稲刈り  稲刈り  千歯こぎ	鎌(かま) 薙(むしろ)
○もみを乾そうさせる ○稲穂についたもみをとる(だっこく)	千歯こぎ(せんばこぎ) 唐箕(とうみ) 回転脱穀機(かいてんだっこき)

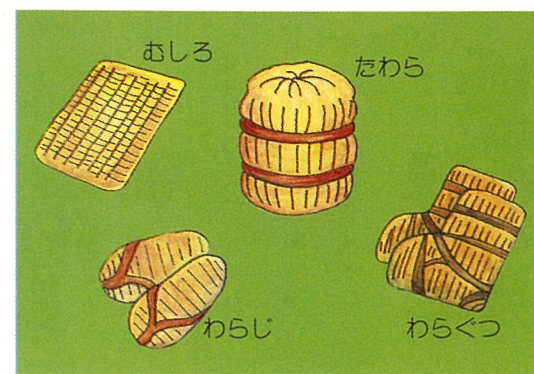


▲千歯こぎ(せんばこぎ)

木の台に鉄の歯をクシのようにたくさんならべて、歯と歯のあいだに稲穂をさしこみ、しごいて脱穀する道具です。



▲薙編機(むしろあみき)



▲ワラでできた道具

このようなワラでできた道具をつくるのは、冬の仕事でした。ワラはほかにも、牛や馬のエサになりました。

米づくりの仕事	使った道具
冬 ○もみがらをとって玄米にする(もみすり)  唐箕	唐箕(とうみ) 万石通し(まんごくとし)
○精米する ○米をちよぞうする ○道具や機械の手入れをする ○稲わらを利用してぞうりやむしろなどの生活用具をつくる	水車(すいしゃ) 唐臼(からうす) 俵(たわら)・唐びつ 薙編機(むしろあみき)



▲万石通(まんごくとし)

臼でもみをすったあと、玄米ともみガラとを選べつするために使ったふるいの一種です。江戸時代末期から明治時代にかけて全国に広まりました。

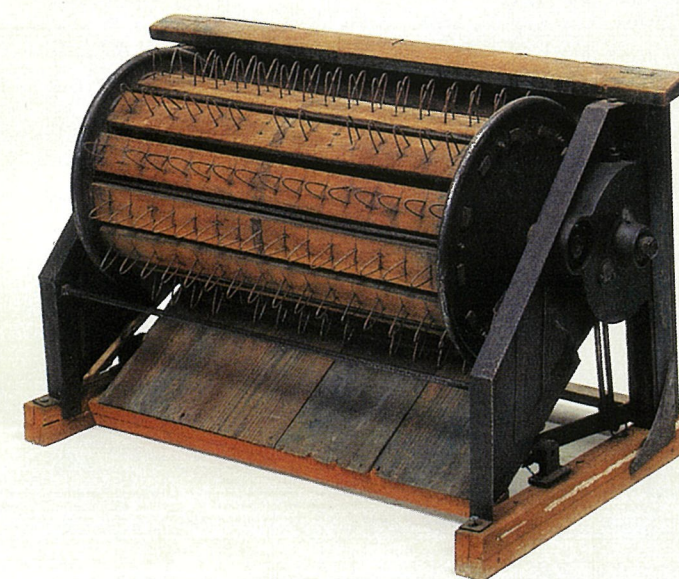
〔市ノ瀬 笹渕勝氏〕



▲唐箕(とうみ)

米・麦などの穀物をより分ける道具です。唐箕は江戸時代に中国から伝わったもので、胴体にとりつけられた扇板をハンドルで回転させ、その風力によって穀物とゴミをより分けます。

〔後野 井上誠氏〕



回転脱穀機
(かいてんだっこき)

全体に逆U字形の金具をとりつけたドラムを、足ぶみで回転させて、稲の穂を脱穀します。

この回転脱穀機は、明治43年に山口県で発明されました。

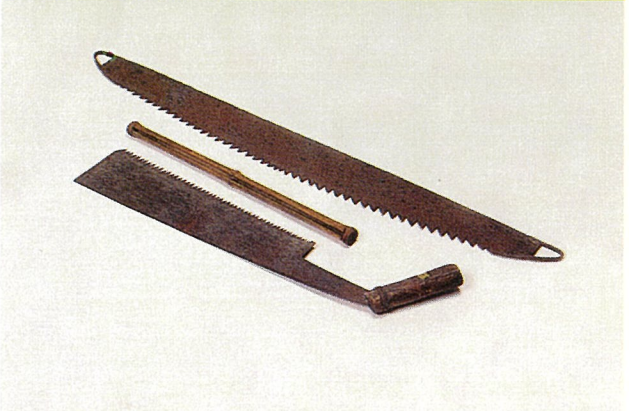
そのほかの 仕事の道具

むかしの農家では、農業のかたわらに養蚕ようさんを行っていました。カイコをそだててマユをつくり、生糸りんぎょうの原料として売ったのです。

また、山手の村では林業がさかんだったので、家には山仕事の道具がいろいろとそなえられていました。ほかにも、川魚をつかまえる道具けいりょうや計量の道具など、くらしを支えてきた道具がたくさんありました。

山仕事の道具

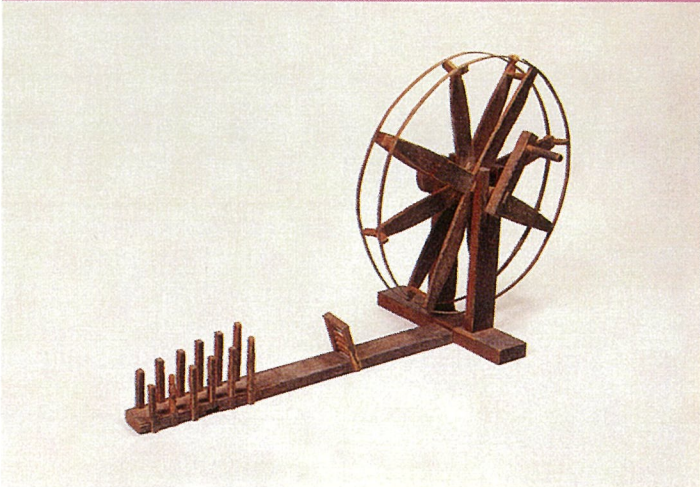
横引き大鋸(よこびきおおのこぎり)



〔一人用大鋸:成竹 池田孝氏〕

養蚕の道具

糸車(いとぐるま)



〔下梶原 後藤弘孝氏〕

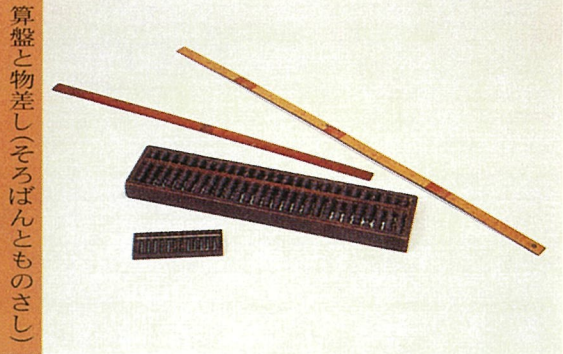
魚とりの道具

てぼと魚かご



〔てぼ:道善 渡辺和子氏〕

計量の道具



〔物差し:片縄 武田辰男氏〕

おわりに

『水と緑的那珂川町』と称されるとおり、町には澄んだ水をたたえた那珂川が流れ、その清流は豊かな大地と緑をこの地にもたらしてくれました。この恵まれた自然ゆえに、古代から多くの人々がここに集い、くらし、そしてこの町ならではの歴史と文化が生まれたのです。

くらしと密着した歴史の移り変わりは、先人たちが使っていた道具の変化にうかがうことができます。この小冊子の中では、近年まで使われていたそれら道具のごく一部を紹介しました。一つ一つの道具の中にも、より使いやすようと工夫を重ねてきた先人たちの努力の歴史がつまっていることを感じていただけたら幸いです。

那珂川町のあゆみ

西暦	和暦	那珂川町のおもなできごと 〈 〉は日本のおもなできごと	人口の推移 (国勢調査による)
1871	明治 4	廃藩置県により、福岡県那珂郡の誕生	22年 6271人
1873	6	大区小区制により、触（ふれ）制度の廃止、戸長制度の実施	
1889	22	町村制施行により南畑村、岩戸村、安徳村ができる	
1894	27	〈日清戦争が始まる〉	
1896	29	那珂郡、席田郡、御笠郡が合併して筑紫郡となる	
1900	33	別所に郵便局が開局	
1911	44	南畑に南畑発電所が開設	
1914	大正 3	〈第1次世界大戦が始まる〉	
1915	4	岩戸村、安徳村に電灯がともる	
1918	7	南畑村に電灯がともる	
1923	12	〈関東大震災が起きる〉	
1942	昭和 17	西鉄バス、昇町市ノ瀬線運行開始	31年 8948人
1945	20	〈太平洋戦争が終わる〉	
1954	29	「岩戸神楽」が県無形民俗文化財に指定される	
1956	31	南畑村、岩戸村、安徳村が合併し、那珂川町が誕生	
1957	32	岩戸地区で有線放送開始	
1964	39	五ヶ山にバスが運行する 〈東京オリンピック開会〉	
1966	41	南畑ダム完成	40年 8859人
1968	43	町内各地で団地造成始まる	
1970	45	〈大阪万国博覧会開催〉	
1972	47	都市計画用途地域の決定	
1973	48	中原に新幹線博多総合車両基地建設始まる 上水道給水が始まる	
1974	49	安徳・岩戸土地区画整理事業工事開始	50年 17646人 60年 30869人
1975	50	山陽新幹線の開通 国勢調査人口が県下一の伸び率(56.9%)を示す	
1990	平成 2	J R 博多南線開業	
1994	6	ミリカローデン那珂川落成	9年 44712人
1998	10	大水害がおきる 上梶原に避難勧告が出される	



◀民具展示・収蔵庫
(外から)



▲民具展示・収蔵庫(中のようす)

発 行 那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町
西隈1丁目1番1号

発行日 第一版 平成12年3月31日
第二版 平成29年1月20日

印 刷 (株)ディスジャパン

